

木綿普及以前の衣料原料の研究

——イラクサ(蓴麻)の利用について——(第6報)

尚綱短大

○村田陽子

遠藤時子

目的 イラクサは古代以来、山村に住む人々の衣料原料として用いられてきたことは文献によって知られている。私達は標題の研究を第5報に続いて更に調査地域を拡大し、利用の実態をより明らかにすることを目的に調査、研究したので報告する。

方法 新に入手した文献記載地を訪ね、あらかじめ設定した項目について古老(なるべく女性)から聞き取り調査を行った。

結果 『染織』1984年8月号の麻の特集に長野・石川両県に「イラ布」とあり、石川県については第4報に報告したので今回は長野県について、北安曇郡小谷村と、岡村吉右衛門著『庶民の染織』所載の同県南安曇郡安曇村の跡付け調査、類似地区として上水内郡鬼無里村、木曾郡開田村を選び利用状況と調査した。小谷村北小谷では戦前まで蓴んに利用されており、刈取った幹と大麻と同じように釜で煮て乾かし、水に漬けてから等引きをし糸に績んで布を織り山着に重用したほか、疊縁布を織って出荷したと云う。同村のあわら地区では既調査地の殆んどと同じくからむしと同様の製法等であった。たいし最後、撚りかけを終えた糸を巻取るとき、木口布で包んで作業を行い艶出しをしている。安曇村番所原では剥ぎとった等と釜で煮た後、板に打ちつけて繊維を裂き易くしている。糸に績んで布にし、袋として用いたとのことで、衣料にしたかどうかは不明であった。類似地区の鬼無里村、開田村においては食用にするのみで等や布に利用することはない。また両村ともに大麻の大生産地で、ことに鬼無里村は江戸時代から戦後も(ほらくは疊糸の特産地として全村がその生産にかかわっていたとのことであつた。